

成人的胃液は、強酸性（pH2）ですが、0～1歳の乳児の胃液は弱酸性（pH6）で、乳タンパク質の消化酵素レンニンと、脂肪の消化酵素リパーゼを含みます。乳児の胃腸は未熟で、胃酸の出も少なく、乳脂肪を消化（分解）し、生じた脂肪酸が胃内を殺菌します。また母乳中に含まれる免疫グロブリン（殺菌力があり風邪やハシカなどの感染を防ぐタンパク質）などが未消化のまま吸収され消化器や呼吸器での病原菌の増殖を抑え、その上、母乳栄養児には牛乳アレルギー症状が殆どありません。しかし、発育中の乳児の消化管は、食物中のタンパク質を十分に分解せずに吸収するため体内に異物が入り込むことになり、アトピー性皮膚炎

などの食物アレルギー症状を引き起します。
最近『ダイオキシンやPCBなどの有害物が母乳中に存在する』の報道はありますが、特に分娩後5日までの初乳はタン

心と がらたの栄養

能岡 浩 [22]

新生児は重いな初乳

大らかな心での子育てが必要

15カ月からは胃液の出が少しづつ増え、食物と共に飲み込んだ細菌の多くを胃酸が殺菌します。しかし、4～5歳の幼児期は成人に比べて胃液の出がまだ少なく、免疫力も強くありません。

◆4～5歳の幼児期『おねしょ・頻尿』などの中には「子供の育ち方が心も体も未完成な子供行動範囲が広がり、日常生活で必要な知識を身に

アップ（母子の肌の触れ合による親密な交流）行動として役立ちます。厚生省は「授乳期間は一年以内と短いため、乳児にとって有害物質は影響なく、母乳をやめる必要はない」との調査結果を平成11年の夏に出しました。離乳食が始まる生後4

ヶ月となる「基本的な信頼関係」ができるからです。のつもりが甘やかしく、子供が何を求めているのを見つけるのが大切です。離乳食が終わるまでの間としての人格形成の基礎となるのです。親の温かい愛情を通して、人間との必要な態度を身につけて、悲しみから立ち直らせるのが対応です。相手の話をじっくり聞き、一緒に涙を流すことで、悲しんでいる人の心の重荷を軽くさせるのが同治です。子育て中の母親には不安・苦しみ・悩みをじっくりと聞いてくれる「同治」が必要です。子供は「仏様からの預かりものだ」と考えて「こんな子に育つてほしい」という大らかな心で、子供の将来に希望をもって子育てすればよいのです

◆4～5歳の幼児期『おねしょ・頻尿』などの中には「子供の育ち方が心も体も未完成な子供行動範囲が広がり、日常生活で必要な知識を身に欲求を無視し、ただ『ダ